

尾形光琳筆「八橋図」 (扇面貼交手筈)について

団扇(うちわ)はその字の示す通り、丸い形をした扇のことです。中国から扇の一種として日本に伝えられ、平安時代に折りたためる扇が作られると、団扇と扇が区別されるようになりました。団扇画が盛んになったのは、中国の南宋時代です。画院に属する画家たちをはじめ、高名な画家たちが絹地の団扇に本格的な絵画を描き、団扇形は中国絵画の伝統的な画面形式となります。このような中国の団扇画は、日本にもたらされると、骨をはずし、掛幅や画帖に改装して鑑賞されました。室町時代には、このような団扇画を日本の絵師が学び、団扇画には漢画が多かったのですが、桃山時代になると、紙製の団扇が普及し、用途や持主の趣味を反映したさまざまな図様が描かれるようになります。例えば、淀君が用いたと伝えられる豪華な団扇(大阪城天守閣蔵)には秋草が描かれ、桃山時代の婦人肖像画、篠原一孝夫人像(石川・妙法寺蔵)も、秋草を描いた団扇を手に入れています。江戸時代も中期になると、団扇画はさらに広く流行し、高名な絵師も描いています。蕪村と交流があった尾張の俳人、井上士朗に、「光琳が

千鳥なくなり古うちわ」という句があり、特に、尾形光琳の団扇画は有名でした。

大和文華館の所蔵する尾形光琳筆「扇面貼交手筈」には、八面の扇面画とともに四面の団扇画が含まれています。団扇画は蓋表に二面の「紅白菊図」、蓋裏に「八橋図」と「雪枯芦図」が貼られ(図1)、いずれも紙地に金箔を貼った上から描かれています。蓋の表裏ともに、二面の団扇を少し上下にずらして重ね、下になった団扇の縦の寸法が上の団扇よりも1.5センチほど短くなっています。これは蓋の寸法に合わせて下の団扇の下方が切られたためであり、構成にかなり配慮して貼られたことがわかります。この切り詰めを考慮すると、四面とも縦が約23.4センチの同形の団扇と思われる。光琳の団扇画には、このような寸法で上部の左右が張った形状の団扇がよく用いられます。骨の跡から当初は柄の付いた団扇であったことがわかりますが、蓋の表裏ともに下になる団扇の方が骨の跡が強く浮き上がっています。骨の跡の状態に、団扇の表裏関係が反映されているとすれば、当初は表裏に「紅白菊図」を

描く団扇と、表に「八橋図」、裏に「雪枯芦図」を描く団扇の二柄であったかもしれません。これらの図様は、いずれも光琳作品によく描かれますが、現状では落款、印章は認められません。これらの作品と光琳との関係を推定するには、他の光琳作品と比較し検討する必要があります。

四面の団扇画のうち、最も光琳が得意とした画題と考えられるのは『伊勢物語』に取材する「八橋図」です。「八橋図」では、二つの板橋で画面を分割し、その前後に杜若を配しています。上下の二段に分けた杜若の叢は画面に遠近感をもたらす、下方に多くの杜若を描くことで、団扇形の画面に安定感を与えています。板橋には、濃淡の変化を付けた墨に白緑を滲ませて、濡れて苔むした木の質感の表現に努め、わずかに反らせて団扇形の輪郭との調和を図っています。杜若はほぼ正面から、画面の遠近をつなぐ二つ目の板橋はかなり上から眺められ、画面には異なる視点合成されていますが、それほど不自然には感じられません。二つ板橋をつなぐ杭の辺に構図の中心を置き、橋板、杭、杜若の花、葉の形をそれぞれに活かしながら、各部分の調和を図っています。

この作品に関連して想起される二点の光琳作品があります。その一つは国宝に指定された蒔絵作品、「八橋蒔絵硯箱」(東京国立博物館蔵)(図2)です。この蓋表の図

様に絵画的な奥行きを与えれば、かなり「八橋図」に近づきます。「八橋蒔絵硯箱」では、まず、鉛の橋、次に、杜若の花を螺鈿で施し、最後に、杜若の葉の蒔絵で全体を整える工程順に制作されたと思われるのですが、「八橋図」においても、絵具の重なり具合から判断すれば、橋板と杭、杜若の花、杜若の葉の順に描いているように見えます。もう一点は、畠山記念館に所蔵される同じ「八橋図」を描く団扇画(図3)です。

この作品では、『伊勢物語』の八橋の地の説明から離れて、かなり意匠的に表現しています。画面の中央に板橋が大きく描かれ、杜若は全てその前方に、団扇の形に沿うように左右に分けて配されています。板橋の硬質な形状が際立ち、柔らかな杜若の表現と、遠近だけではなく、質感においても対照的な効果を上げています。画面には、この板橋の傾きにに応じて、ちょうどウィングラスを少し傾けたような力強い絵画空間が生じています。このような絵画空間は分節的にまとめられた各部分の調和を図る大和文華館の作品とは異なります。杜若の花の表現にも、大和文華館の作品との相違が認められます。群青と白の花がほぼ均等に混じり合い、その形状も水平方向に広がって、縦方向に伸びる葉との対照が強められています。なお、このような杜若の花の描写は、軸芯の墨書銘から宝永二年に描かれたと考えられる「草花図巻」に見出せます。早急に判断することはできませんが、これらの三点の作品、特に、大和文華館と畠山記念館の二つの「八橋図」を描く団扇画の関係を考察することは、光琳芸術を理解する上で、重要な視点を提供してくれるように思います。(中部義隆)

挿図のうち、畠山記念館所蔵の「八橋図団扇」は『日本美術絵画全集第一七巻 尾形光琳』(昭和51年8月集英社刊)、「八橋蒔絵硯箱」は『平凡社ギャラリー10 かきつばた 光琳』(昭和49年1月平凡社刊)より複製させていただきました。

図1 扇面貼交手筈(蓋裏)

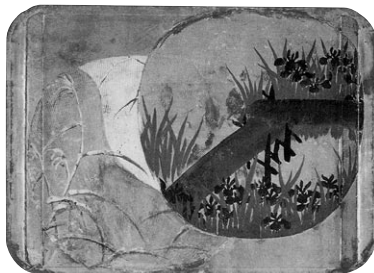


図2 八橋蒔絵硯箱



図3 ハッ橋図団扇

